みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The Traditional Hunting Production of the Ewenki People and Orochon People

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 卡麗, 娜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003859

国立民族学博物館研究報告36(4): 457-492 (2012)

エヴェンキとオロチョンの伝統的狩猟

卡麗娜*

The Traditional Hunting Production of the Ewenki People and Orochon People

Kalina

中国のエヴェンキとオロチョンはアルタイ諸語のツングースの語派に属する長い文明を有する遊猟遊牧民族で，万物有魂というシャマニズムを信仰し，現在主に中国の内モンゴル自治區と黒竜江省に居住している。長い歴史中にエヴェンキとオロチョンは豊かな狩猟文化を発展させた。この論文は狩猟組織・狩猟工具・狩猟方法・国外関連民族の狩猟活動との比較などの4つの視点からエヴェンキとオロチョンの伝統的な狩猟生産を詳しく述べ，彼らと自然と調和し，環境によく適応した生業技術と生活方式を紹介していく。

The Ewenki and Orochon people belong to Altaic Manchu - Tungus family, which is an old and civilized nomadic hunting group. They believe in shamanism, which holds the idea that all natural objects and the universe itself have souls—that is, animism. Now they live in China's Inner Mongolia Autonomous Region and Heilongjiang Province. In a long historical process, the Ewenki and Orochon people have created and developed a hunting culture with rich connotation.This paper describes the culture from four different aspects-hunting organization; hunting tools; hunting method and a comparison with the hunting activities of other ethnic group. From this, the paper illustrates the wisdom of their harmony with nature, their survival skills in adapting to environment, and their way of living a civilized life.

*中央民族大学民族博物館・国立民族学博物館（外国人研究員）

キーワード：エヴェンキ，オロチョン，狩猟，組織，方法
Key Words : The Ewenki people, The Orochon people, hunting, organization, method

1　はじめに
2　狩猟組織・猟区・猟師
3　狩猟用具
4　狩猟方法
4.1　追跡猟
4.2　囲み猟
4.3　誘い猟
4.4　待ち伏せ猟
4.5　穴猟
5　海外の狩猟民族の狩猟用具と方法との比較
6　結語

1　はじめに

筆者は，幼少の頃よりエヴェンキの集住地域に住んでおり，オロチョンの人々との付き合いもしばしばあったので，両民族の伝統的な生産活動や生活に馴染んできた。文献資料を渉猟しつつ彼らに関する調査研究を本格的に始めたのはもっと後のことだが，本稿はそのような筆者の個人的な関心と学術的な関心に基づいている。

エヴェンキとオロチョンは独自の文書資料を残さなかった。そのために，彼らに対する他民族の記録は一方的な見方で書かれており，量もわずかだった。近現代の調査や研究資料も表面的な描写が多く，詳細とはいえなかった。そこで，より詳細な記述を目指して，自ら調査研究を志すことにした。1992 年から 2008 年まで，筆者はエヴェンキとオロチョンの主要な集住地域である中国内モンゴルのフルンボイル市のオロチョン自治旗，エヴェンキ自治旗，アロン（阿栄）旗，モリンダワ（莫力達瓦）ダウール族自治旗，陳バルグ（巴爾虎）旗，根河市などで実地調査を行い，100 名あまりのエヴェンキとオロチョンの人にインタビューし，フィールド・ノートに書き留めた。伝統的な狩猟活動に関しては，18 人（内エヴェンキ 12 人，オロチョン 6 人）のインフォーマントにインタビューした。これらの人は当時，30 ～ 80 歳代の猟師とその後継者たちである。本稿は，筆者が長年の調査で手に入れた資料（それらの資料に基づく報告の詳細は筆者が中国語で記した『馴鹿鄂温克人文化研究』（卡麗娜 2006）を参照）と，関連する文献資料に基づいて書いたもので，主に 1950 ～ 70 年代におけるエヴェンキとオロチョンの狩猟活動について記述したものである。エヴェンキとオロチョンは，互いを同じ民族の異なる下位集団だと考えている。さらに，両民族は近くに住んで，頻繁に接触し，多くの狩猟文化，狩猟技術を共有しているため，本文では両者を一体として記述した。

1992 年，筆者が調査を始めたばかりの頃には，中国ではすでに狩猟が禁止され，伝統的な狩猟生産活動や狩猟用具を観察することが困難になっていた。そこで，本稿で紹介する彼らの狩猟活動に関する資料や情報は，インフォーマントの記憶と口述に依拠している。また，秋浦が編集した画集『鄂倫春族』（1984）の中の写真類，国立民族学博物館の展示，収蔵庫の標本資料の写真も援用した。

中国領内のエヴェンキとオロチョンは共にツングース系の言語を話し，伝統的な狩猟文化を保持し続けた民族である。それぞれの固有言語の文字表記はないが，現在は漢字やモンゴル文字を使用して表記する事がある。エヴェンキ（Ewenki）は中国語では鄂温克，オロチョン（Orochon）は鄂倫春と表記されている。2000 年における中国の人口統計によると，エヴェンキが 30,505 人で，オロチョンが 8,196 人である。彼らは現在，主に内モンゴル自治區と黒竜江省に分布している（地図 1）。

エヴェンキとオロチョンは 17 世紀前バイカル湖，興安嶺，黒竜江の広大な地域に居住し，氏族単位に分かれて生活した。その後，黒竜江の南，大，小興安嶺と周辺に遊猟した。エヴェンキは主に大興安嶺の東南から西北までの地域に定着し，オロチョンは主に黒竜江流域，小興安嶺及び大興安嶺東西地域，特に東地域を狩猟活動の場とした。1989 年 3 月『中華人民共和国野生動物保護法』が実施されるまで，彼らは，伝統的な狩猟活動を行い，社会制度，物質文化，精神文化等からなる狩猟文化を創り出した。狩猟活動は彼らの最も重要な生活基盤である。

ここで，エヴェンキとオロチョンの狩猟組織，狩猟用具，狩猟方法，および中国以外の関係する諸民族の狩猟活動との比較の 4 つの観点から，エヴェンキとオロチョンの伝統的な狩猟活動を具体的に記述していきたい。

2　狩猟組織・猟区・猟師

エヴェンキとオロチョンの社会は 1940 年代末まで，集団生産と平等分配という要素を持つ父系血縁関係による氏族社会の特徴を見せていた。氏族は幾つかの集落 *uriren* に分かれ，集落はさらに幾つかの家 *ju* に分かれる。*ju* は最も下位の生産組織である。

エヴェンキとオロチョンの各氏族にはシャマンと氏族長がいる。シャマンは氏族内で高い地位と権威を持ち，人々の行為を統制する。氏族長は選挙で選ばれる。一般的に狩猟経験が豊かで，人望が高く，組織的な能力にすぐれた中高年以上の世代の人が，*uriren* の長老たちによって選ばれる。選ばれた氏族長は氏族のシャマンの協力の下で

公正に氏族内をまとめる。*uriren* にも長老がいる。長老が *uriren* の指揮権を持って，生産活動の計画を練り，彼は春夏秋冬，各季節の野生動物の習性や，*uriren* のなかの人々の狩猟技術のレベルを見極めて，生産活動の役割分担を決める。レベルの高い 5 人ほどの男子が 1 つのグループを組み[1)]，主に衣，食の材料となる大型野生動物ヘラジカ，アカシカ，ノロジカ，イノシシなどを捕る。体力のない人や婦人，狩猟技術レベルの低い人は魚捕りや洗濯，食事の用意などの仕事を分担する。猟の終了後，狩猟グループは自動的に解散する。次の狩猟活動には改めてグループを編成し，人員も再編成する。

エヴェンキとオロチョンの伝統的な狩猟活動の中には，活動や行動を規制するような慣習も見られる。例えば，妊娠した野生動物や自分たちの生活に必要以上のものは捕ってはいけない。捕獣器（トラバサミ）や仕掛け弓を設置するときは，必ず居住地より遠く離れた場所に，目立つ標識をつけて仕掛ける。狩猟終了後には，必ず仕掛けを回収する。回収しなければ，野生動物が仕掛けに捕われたまま，無駄死にになると考えているのである。また狩猟期間に踊ったり，歌ったり，“明日は必ず獲物が捕れる”など大言壮語するような行為は禁じられている。狩猟の時にリーダーは誰が何を捕るという言葉を口に出してはいけない。神様のおかげで何かを捕れるよう幸運を祈る。獲物を捕って来ても，喜びを顔に表し，大騒ぎしてはいけない。さらに捕って来た獲物を両手で捧げながら，「見て，これは何の福音？」という。やむを得ず捕ったクマに対しては，風葬の儀式を行い，人々がカラスの真似をしてカラスの鳴き声をする。この行為はクマを食べるのは人間ではなく，カラスであることをクマの霊や森の神にアピールするためである。また，狩猟をする場所の方向に銃を撃ってはならない。一般的に巻狩りで囲まれた獲物に対しては，皆に射撃の名人と認められている人が真っ先に撃つという慣習も見られる。

猟へ出る前にはシャマンが猟に出る人々のために，儀式を行い，神々に狩猟活動が安全に，かつ獲物が捕れるように祈りを捧げる。狩猟の終了後にはシャマンが再び儀式を行い，神々に，獲物をもたらして，エヴェンキに繁栄と祝福を送ってくれたことを感謝する（図 1 ～図 3）。

エヴェンキとオロチョンのこのような狩猟に関係する慣習や行為にはシャマニズム的な信仰が基礎にある。彼らにとっては，天には天の神，山には山の神がいる。世界中のあらゆるものに神霊が宿っていると考えられていて，人間が自然のあらゆるものを大事にすれば，あらゆるものから恩恵を得ることができる。だからこそ，神々や精霊から衣食などのものが貰える。自然環境を大事にしないと，神々や精霊に罰せら

れ，自然に依存している人間も絶滅の運命に至ると考えられている。このような世界観を持つエヴェンキとオロチョンは，人口が少ないながらも今日まで自然と共に生きてきた。

狩猟という生業は安定的ではないので，人々が生産活動で相互に協力し合わなければ生きていくことができない。そのために，エヴェンキとオロチョンは自然から捕れた獲物を必然的に平等に分配する[2)]。分配は長老が *uriren* の *ju* を単位として行う。例えば，ひとつの *uriren* の中に 5 戸の *ju* があれば，獲物の心臓を 5 つに分けて各家庭に分ける。平等に分配できない物（毛皮など）は次の狩猟の時に，前回分配されなかった人に優先的に与えることで平等性を保とうとする。しかし原則的に，猟師が自分で捕った獲物の毛皮を所有することは禁じられ，獲物が捕れていない人や老人，女，子供などにあげなければならない。以上の規則を守らないことは，エヴェンキやオロチョンの社会で最も恥ずるべき行為とされる。

エヴェンキとオロチョンの狩猟活動には，一定範囲の狩猟領域（猟区）が必要である。領域は人為的に分割されるものではなく，長年の狩猟活動や慣習によって定められたものである。人々が新たな地域に移動した時には，氏族長がその土地で狩猟ができるかどうかを検討し，できると判断すれば，その氏族の人々がそこを自分たちの狩猟領域として利用することになる。氏族の領域の中では，河川を中心に各 *uriren* の猟区を決める。普通は，各氏族と *uriren* は 1 ～ 3 年の周期で集会を開き，各々の猟区を確認しあう。そのため，氏族と氏族や *uriren* と *uriren* 間の猟区の紛争は殆ど起きない。たとえ猟区の境界がわからない状況で，誤って他氏族の猟区に入ったとしても，他人の足跡を見つけた場合，速やかにその猟区から離れればよい。まれに，同じ *uriren* の者が同じ猟区で偶然相遇し，協力して狩猟をする場合がある。その時狩猟のリーダーたちがお互いに話し合い，狩猟中に起こった問題を解決する。捕った獲物は狩猟の参加者の間で食べる以外は，平等に分配する。

氏族の領域や猟区ももちろん一定不変なものではなく，長期間利用する内に獲物となる動物の数が減ってきて狩猟がうまくいかなくなると，氏族長の判断で他の猟区や地域に移動する。移動によって元の地域や猟区の動植物は時間と共に回復する。また，季節による猟区の変更もある。そのような移動では，人々は一定の経路に沿って，毎年一往復をすることになる。そのような利用では，猟区は冬季猟区，夏季猟区，春秋季猟区に分かれる。

猟師の居住地は一般的に風当たりがなく，草の質がよい，川に近い所に設置される。彼らは *serinju* という簡易住宅に住む。

狩猟活動は自然に頼る生産活動であるため，周囲の山水及び動植物の習性を熟知せず，猟具を使いこなすことができないと，生活は保障されない。そのためにエヴェンキとオロチョンの人々は長い間の狩猟活動を通じてその知識と技能を積み重ねてきた。優れた猟師になる条件には，豊富な地理の知識を持ち，様々な山の位置と河川の分布を把握し，生えている植物の相違によって動物の生息環境と行動パターンを的確に推理し，各種の動物の習性を把握していて迅速な行動がとれることをあげることができる。優れた猟師は様々な狩猟方法を知っており，季節，地形，獲物とする動物の違いによって，その場に最適な狩猟方法を選択する。その上で，弓矢にせよ銃にせよ，正確な射撃術が求められる（図 4）。

猟師たちは常に先輩と後輩が共同で猟をする。狩猟活動の中で先輩が後輩に様々な狩猟経験を伝授するためである。また，狩猟後の暇な時間に皆が集まって自分たちの経験や狩猟中の出来事（怪談や不思議な話も多い）を皆で話し合い，情報と技術の交換を行う。例えば，どこの山で，どこの川で，どのような獲物を，どのような技術，道具で捕ったか，弓矢や銃の性能と射撃方法，如何なる方法で野生動物を探し出し，そしてどのように野生動物の足跡を追跡したか，更に野生動物の皮剥き，解体，肉の分別の様子など細かく語る。

このような環境の中で，子供達は，幼い頃から狩猟活動に興味を持つようになる。一般的にエヴェンキとオロチョンの男の子は 5 ～ 6 歳から年寄りに白樺の木で作って貰った弓や銃で狩猟遊びをしたり，的を撃つ練習やスキーの練習をしたりして，お互いに鍛えあう。10 歳頃からリスなどの小型野生動物を捕る。12 歳になると，大人の狩猟活動に参加するようになり，15 歳になるとアカシカ，ヘラジカ，イノシシなどの大型野生動物を捕るようになる。大型獣が捕れるようになれば，やっと一人前の猟人と認められる（図 5 ～図 7）。

3　狩猟用具

銃器類が普及する以前のエヴェンキとオロチョンは弓と，アカシカやヘラジカなど野生動物の骨で作った鏃をつけた矢で狩猟活動を行っていた。それ以外の補助的な用具としては，槍，木棒，木鋏，白樺の皮で造った船，スキー板，鹿笛及び猟犬等などがあった。弓は黒樺の木と落葉松の木を貼り合わせたものである。落葉松は弾力性に優れ，それを弓の裏側に使う。黒樺の板と落葉松の板の間にアカシカ，ヘラジカの腱を挟み，細鱗魚の皮で作った膠で接着する。これによって弓の本体が丈夫で折れにく

くなる。弓の弦は鹿の腱で作る。鹿の腱を剥離した後に風で乾かしてから，木の槌で腱が繊維になるまで叩き，2 本の腱の繊維を 0.5 ～ 1 m の 1 本の紐に縒り上げる。矢柄は白樺の木で作り，矢羽は鴨の羽で作る。鏃は鉄が普及する以前は動物の骨で造られていたが，鉄の普及とともに鉄の鏃が多く使われるようになった。鏃が石から骨，骨から鉄へと変わることによって，弓矢の生産性が大幅に向上した。

エヴェンキとオロチョンは，20 世紀初期まで仕掛け弓（弩）で獲物を捕っていた。普通，猟師は 1 人で十数機の仕掛け弓を持つ。彼らは仕掛け弓を動物がよく通る道（獣道）に仕掛ける。主にクロテン，テン，キツネ，イタチ，オオヤマネコ，カワウソ，アナグマ，ムジナ，ノロジカ，ジャコウネズミ，ユキウサギなどの中型，小型の野生動物を捕る。まれにアカシカ，ヘラジカなどの大型野生動物も捕る。仕掛け弓は落葉松の木で 1.5 m の本体を作り，ヘラジカの腱で弦を作り，白樺の木で約 1 m の矢柄を作り，鉄の鏃と矢羽をつける。仕掛け弓を掛ける時は，二股に枝分かれした，高さ 10 ～ 50 cm の小さな樹木の二股の間に 1 本の木を横にたおし，横木の上に弓の弦を固定する仕掛けを作る。弓を固定した後に弦を仕掛けまで引っ張って，横木の上の仕掛けに紐で結ぶ。もう 1 つの端を動物がよく通る道を横切るように張る。野生動物が道を歩いていて，張られている紐に気づかずに触ると，紐が横木の上の仕掛けを落とし，矢が発射される。鉄の鏃はロシアの商人やダフール，満族の商人 *inda* から交換して入手した物である（図 8 ～図 10）。

仕掛け弓の製作には専門の職人がいるわけではなく，猟師が自分で作った。昔は，仕掛け弓を仕掛ける事について，厳しい規則があった。仕掛け弓は必ず居住地から 15 km 以上離れた場所に仕掛けること，しかも仕掛けた場所に目立つ印を付けること，などである。そうしなければ，人や家畜に害を及ぼす可能性があった。仕掛け弓には危険な面もあったために，銃が普及すると使う人は徐々に少なくなった（図 11）。

槍は人類が石器と木の棒の次に使用したと考えられるほど古くから使われてきた狩猟用具である。後に弓が出現したために，槍は補助用具の地位に甘んじるようになった。エヴェンキとオロチョンは，初期は石または骨で槍先を作っていたが，銅や鉄が使えるようになると槍先もそれらに変わった。槍先は長さ約 30 cm，両面に刃を持ち，約 1 m の木の柄の先に嵌める。野生動物に相遇した時，距離が遠い（30 m 以上）場合は弓を使い，近い（30 m 以内）場合には槍で仕留める。

鹿笛は木で作った物で，一般的に松あるいは白樺の木で作り，上端は細長くて平たい形，下端は太くて頭がすこし擡げている。長さは約 60 ～ 80 cm，吹き口の内径は 2.5 cm，外径は約 4.5 cm，下端の幅は約 13 cm である。口元を斜めにして吹き口に当

て，息を吸って唇をならす。口の形と息の強弱で音を奏でる。鹿笛の細い上端でアカシカの鳴き声，太い先でヘラジカの鳴き声の擬声音が出せる。鹿笛は発情期のアカシカとヘラジカを誘うために使う。

鹿笛の作り方は，まず，厳選された木材を縦に 2 つに割り，芯に沿って上端が細く下端が太くなるように凹型に彫る。最後に 2 つの半円状の部材に，魚の皮で作った膠を塗り付けて，2 つの木材を合わせて革紐あるいは白樺樹皮の紐で縛り付けて固定する。ある物は下半分の上の方に 2 つの凹型の槽を作ることもある。

鹿笛はアカシカとヘラジカの交尾期の猟に使われる。雄を猟師の射程範囲内におびき寄せることができることから，確実に獲物を射止めるのに役立った。1980 年代末期までエヴェンキとオロチョンの人々に幅広く使われていた（図 12，図 13）。

ノロジカ笛 *pikaran* は俗に“白樺皮笛”とも呼ばれ，やはり野生動物の擬声音を出せる用具である。猟師は獲物があまりよく捕れない時に，この白樺皮笛を用いて子鹿の声を出し，雌のノロジカを誘い込んで捕る。また，それを使って子鹿がいると思い込ませて，ノロジカの天敵であるオオカミやオオヤマネコなどを捕ることもある。

作り方は，まず，1 枚 6 cm 四方の薄い白樺の皮を真ん中から折り畳み，上が円形，下が四角い型になるように切り取る。対照的に折り畳んだ 2 つの白樺の薄皮を松脂の糊で接着してから，上部の円形の部分と下の平らな部分に 2 cm ほどの空気穴を作る。使う時には親指と人差し指で笛の両端を挟み，軽く内側へ押すと，笛の内側に空気の抜け道ができる。半円形の上端を唇に付け，軽く吹くと子ジカの鳴き声が出る。2 つの白樺皮笛を重ねて，長さ 10 cm，幅 2 cm に折り畳んだ白樺の皮の上に貼り付ける事により，擬声効果が更に高まる。

エヴェンキとオロチョンにとって，スキーは冬の狩猟には欠かせない履き物である。スキー板は，主に松あるいは黒樺で作った幅約 20 cm，長約 150 cm，厚約 2 ～ 3 cm の板である。板の前後とも反っているが，尖った前端部分はやや高く反り返らせている。平らな後部の反りはやや低い。板の両端を反らせる理由は，高速で滑る時の雪の抵抗力を減らし，更に，小さな障害物も乗り越えられるようにするためである。板の真中の両端に 4 ～ 6 個対照的に穴があけられ，その穴から革紐を通して，靴を縛って固定する。板の裏面にヘラジカのスネの皮，あるいは，イノシシの脚の皮を貼り付ける。板の裏面に毛皮を付けることによって，素早く前進し，後退しにくくなるという効果がある。板の幅が広いのは，浮力を増大するためと考えられる。これは，カナダの先住民が雪上を歩くのに使う，幅の広い網状の靴（カンジキ）と同一原理であろう（図 14）。

伝統的な白樺の樹皮で作った舟は，かつてエヴェンキとオロチョンにとって重要な狩猟用具の 1 つだった。河川の往来，渡河，物資の運搬，漁労生産活動等に重要な役割を担った。白樺樹皮舟の大きさは，長約 7 m，幅約 0.8 m で，前後両端とも細長く少々反り返っている。この舟はとても軽く，大人 1 人で持ち歩くことができる。白樺の樹皮で造った舟は，まず，クスノキの木材で舟の骨を組立てる。次に，白樺の皮を舟の骨に 1 枚ずつ重ねて張る。第 3 に，落葉松の根の皮を剥いで，水に浸して，造った紐で舟の骨と白樺の皮の連結部分を縛る。第 4 に，3 kg 余りの新鮮な白樺の脂と松の脂を白樺の皮の連結部分と皮の小穴に塗る。これによって舟の中への浸水を防ぐ。第 5 に，舟を引っくり返して，それを舟の形に整形した木型の上に被ぶせる。同時に，舟の両端に石など重みを掛けて，舟を独特の流線型の形に整形する。このような舟ができあがるまでにおよそ 7 日かかる。白樺の皮で造った舟は，金属や金属で作った釘，化学製品など一切使われていない。完全に白樺の樹皮，松の根，クスノキと白樺の木材，松の樹脂など天然素材で造られている。これはエヴェンキとオロチョンが自然を自分たちの知識と技で上手く利用した結果である（図 15，図 16）。

エヴェンキとオロチョンは鋏（バネの原理を利用した挟み込み式の罠，捕獣器）を狩猟用具として使ってきた。鋏は木製，鉄製と鉄と木の両者を併せた鋏の 3 種類がある。木製鋏は一般的に小型の動物の巣穴の出入り口，及びキジ，サケイなど野鳥が出没する場所に設置する。木製鋏は弓，大鋏，小鋏，木の棒，紐が付けられた小さい木材の 5 つの部分で組み合わせられている。ナラで弓を作り，太さ約 0.5 cm，長さ約 3 m の麻縄を使って弦を張る。次に同じくナラで半円状の大小鋏を作る。大鋏の両端に麻縄を結び付け，それを弓と弦の上に固定する。小鋏は木製鋏の弦の上に固定する。弓の上に長さ 18 cm の木の棒を結び付け，弦の上に 9 cm 余りの紐を結び，その端に溝がある 2 cm 四方の木を結び付け，野生動物を誘う餌をこの木の上に置く。木製鋏を仕掛ける時は，まず小鋏の弦を開き，弦の上の木の棒の端を，弓と溝がある 2 cm 四方の木の間に固定する。獲物が餌を食べれば，木の棒が溝から出され鋏が作動し獲物が捕らえられる（図 17）。

木鉄製鋏は木製鋏の改良型で，一般的に小型野生動物の穴の出入り口に設置され，チンチラなどの野生動物を捕る。鉄器が使われ始めた頃は鉄が貴重品だったため，狩猟用具に使う鉄はできるだけ節約された。したがって，狩猟用具は基本的には木製で，重要な部分にだけ鉄を使用した。木鉄製鋏は木製の三角形の枠，移動板鋏，支え棒，小さい木の板，鉄ばね，鋼ばねなどで組み立てられたものである。木製の三角形の枠の材料となる板は長さ約 50 cm，幅約 4 cm である。枠の長い部分に長さ約

20 cm，幅約 2 cm の細長い穴をあける。その穴に長さ約 20 cm，幅約 1.5 cm の移動板鋏を入れ一方の端を三角形の枠の短い方の辺の端に付ける。ただし，しっかりと固定はせず，移動板鋏が回転するようにしておく。他方の端は鉄ばねの端に固定される。鉄ばねの他の端は三角形の木の板の長辺に固定されている。移動板鋏の端に小さい穴を開ける。支え棒の端は，小さい木の板が紐で結わえ付けられ，もう一方の端は，長さ約 8 cm の麻紐を使って，移動板鋏の端の小さい穴に縛り付けられる。鋼鉄ばねの両端を三角形の木の板の長辺と移動板鋏に嵌め込み，2 つの板を支える。使う時に，移動板鋏を開き，支え棒で支え，設置しておく。チンチラなどの小型野生動物が支え棒を触ると挟まれる（図 18）。

鉄製鋏（トラバサミ：捕獣器）は取手のある半円形で，弓形鉄の枠，はね取手，鉄の円形踏み板，鉄の仕掛け棒の 4 部分で組み立てた。弓形鉄の枠には歯が付いているものと歯が付いていないものとがある。野生動物が出没する場所に設置する。設置する時は 2 つの弓形鉄の枠を開き，鉄の止め棒で枠を止める。止め棒が円形踏み板と連結されているため，野生動物が踏み板を踏むと鉄製鋏に挟まれる。また，鉄製鋏と近い木鉄製鋏がある。この鋏の枠が木で，鋏が鉄製である。枠の中間に V 字形の踏み板が設置され，半円状の鉄ばねを枠の中央に固定する。使う時，鉄ばねを開き，止め棒でばねを固定する（図 19）。

エヴェンキとオロチョンは以上の狩猟用具以外に，また刀，馬の尻尾の毛で作った紐あるいは麻縄網，落とし穴，木または氷などの重い物を狩猟の補助用具として使っていた。例えば，主にオオカミ，イタチ，オコジョなどの獲物を捕る罠は，木の二股の枝のような形をしたもので，*rongu* と呼ばれる。この罠の枝の 1 つに餌となる肉を置く。獲物が肉をめがけて飛び跳ねると前足が二股の間に挟まれる。また，大きな木や氷，あるいは大きな石などのような重い物の片方を持ち上げて，木の支柱で支え，支柱の下に餌として肉を縛りつけ，獲物が餌を引っ張ると支柱が外れて重い木や氷，石が獲物の上に落ちてきて捕らえる罠（重力式罠）もよく使われた。

エヴェンキとオロチョンの狩猟用具には，刀，矢先，槍先等のように，鉄製のものも相当数入っている。鉄鉱石から鉄を精錬する技術を持たないエヴェンキとオロチョンは，屑鉄を手に入れ，それを熱して鍛え直して新しい武器や道具を作った。鍛冶は露天で行った。まず，a）簡易な炉を作り，炉の真中に鞴を装着する穴を作る。b）白樺の木を火が芯に至るまで燃やした後，直ぐに水を撒く。瞬間的に冷却された樺の木は炭になる。c）大木で桶を作り，鉄を冷却するための，水を入れて用意しておく。d）2 枚の木の板をノロジカの皮で合わせ，先に吹き口，後部に取手を付けた，*kurugge*

と称する桃の形に似た鞴を作る。鍛冶には同時に 2 台の鞴を使用する。e）作る用具の形を取った型を用意する。同時に鉄を挟む鋏，金槌，やすり，砥石なども用意される。

鉄器を鍛造する時には，鍛冶職人が 2 人，もしくは鍛冶職人 1 人と助手 1 人が必要である。1 人が鞴を使って炉に風を送り続け，もう 1 人は鉄の鍛錬に集中する。工具を型から取り出して，やすりで余分な部分を削り取り，繰り返して研磨して形を整える。形が整った工具を再び加熱し，加熱された工具を迅速に水で冷却して硬度を高める。森の中で狩猟生産活動を営むエヴェンキとオロチョンにとって，自ら加工した鉄器は，狩猟の生産効率を高め，生活改善に貢献した。同時に，狩猟文化にも新しい色彩と内容が注ぎ込まれたのである（図 20 ～図 22）。

エヴェンキとオロチョンの間にはトナカイの飼養より猟犬の飼養の方がもっと古いという言い伝えがある。猟犬は獲物を追跡したり戦ったりするだけではなく，飼い主の意思を良く理解し，かつ忠誠心のあつい動物である。エヴェンキとオロチョンの人々は，そのような猟犬に深く感謝しているために，犬の肉を食べる事は禁じられているという。彼らは，犬を 1 歳の時から，チンチラなど小形の野生動物がいる所に連れていって狩猟の訓練を行う。猟に行く前には，犬に食べものを与えない。空腹状態の方が，野生動物の匂いに敏感になるからである。猟師が動物を捕らえた時は，その肉を犬に与える。訓練によって犬が動物の匂いに馴染むようにするためである。犬が 3 歳になると，猟人は犬が野生動物の跡の匂いを嗅ぎ分ける訓練や，野生動物に噛み付く訓練を行う。同時に，捕った獲物の肉を犬に与える。このような訓練によって，犬はやっと一人前の猟犬になれる。

鉄砲はエヴェンキとオロチョンが比較的後代になって使用を始めた重要な狩猟用具である。資料によっては，18 世紀すでに鉄砲が使用されていたともいわれる（内蒙古自治區編輯組編 1985a: 11–12, 78–80, 182–183; 1985b: 13–15, 205–206; 1986: 47–49, 166–171）。エヴェンキやオロチョンが使用していた鉄砲には火縄銃 *liansha*，燧式銃 *gande*，洋式銃 *intokke* の 3 種類がある。この 3 種類の鉄砲はすべて火薬と鉛玉を鉄砲の筒先から入れる（先込め銃）。そして火縄，火打ち金，あるいは引火砲で引火させ，弾を撃つ。火縄は木の皮を縒って作ったもので，火打ち金と引火砲は購入したものだった。鉄砲の射程は 70 m 位である。猟人は白樺に寄生する植物を火種にする。この寄生植物に火をつければ，燃焼するだけで，燃え上がらず，しかも長い時間燃焼し続ける。猟に出る時や移住する時に，猟師は棒の端に火種を掛け，その棒を自分の背中のベルトに挿して歩く。このような旧式の鉄砲は中華民国初期には使われなくなってい

た。

19 世紀末期エヴェンキとオロチョンの狩猟用具は重大な変革期を出迎える。射程が 200 m にも達するロシア製の「別拉弾克銃」（ベルダン銃）が出回ってきたのである。この銃の普及の影響で，古い生産方式（例えば，樹皮舟で獲物に近寄り槍で射る等）が徐々にエヴェンキとオロチョンの狩猟技術から消えていった。ベルダン銃の弾の値段は高くて，かつ手に入れるのは難しかったため，エヴェンキとオロチョンの人々は，引火砲，火薬，鉛を商人から交易で手に入れた後，使った薬莢に火薬と自分たちが作った鉛の弾丸を詰めて弾を作った。ベルダン銃は殺傷力が強く，鉄砲のように火薬を現場で詰めたり，火種を持ち歩いたりする必要がなく，また，天候に影響されることもなく使えるために，たちまちエヴェンキとオロチョンの間で広がった。

20 世紀の初年になって，エヴェンキとオロチョンの人々は，ベルダン銃をさらにロシア製の「連珠銃」（自動銃）に切り替えた。この銃の射程は 400 m までに達する。連珠銃はエヴェンキとオロチョンにより多くの獲物をもたらし，狩猟経済をより一層発展させた。1920 年代エヴェンキとオロチョンの人々は，中華民国政府から「套筒銃」と「七九式銃」を買い取った。1938 年には日本人より「三八式」や「九九式」などの銃を入手することができた。1949 年，新中国政府がエヴェンキとオロチョンに，旧ソ連から輸入した新型の小型野生動物を捕る小口径銃「孟炮勒」，及び大型野生動物を捕る「臨七九」銃を配給したのである（図 23 ～図 25）。

銃器の流入と更新は，猟師の単独行動を可能にし，捕らえる獲物の数の増加をもたらしたことから，自分達の生活に必要な量以上の獲物を捕らえ，余った獲物を商品として市場に持ち込むことを可能にした。鹿茸，鹿の尾等は市場で貴重な商品となった。この変化は，私有財産の拡大と氏族組織内部の分化を引き起こした。エヴェンキとオロチョンの狩猟生産能力と生産性は大幅に向上し，交易が活性化し，地域の特色のある商業活動が発展した。特に，射程距離が長い銃の出現は，エヴェンキとオロチョンの生産力の発展に新たな希望をもたらした。

4　狩猟方法

エヴェンキとオロチョンが生活している広大な森の中には，アカシカ，ヘラジカ，ノロジカ，イノシシ，オオヤマネコ，チンチラ，キツネ，オオカミ，野生ヒツジ，アナグマ，クロテン，テン，ジャコウネズミ，イタチ，シマリス，オコジョ，カワウソ，ノロジカ，クマ，トラ，ヒョウ等の野生動物がいる。また，榛鶏（雷鳥科の一種），

烏骨鶏，キジ，カモ，サケイ，ウズラ等の鳥類もいる。

エヴェンキとオロチョンは，17 世紀から 18 世紀初期にアムール川の北からやって来た。当時は小型の皮毛獣が比較的少なかったために，商人がやって来ることも少なかった。そのため，主に衣食の源になるアカシカ，ヘラジカ，ノロジカ等を捕って生計を立てていた。しかし，20 世紀初期にアムール川流域及び沿海地方の貿易が衰えてくるとともに，アムール川の南にもしばしば商人が来るようになり，エヴェンキ，オロチョンたちも交易を目的にクロテン，テン，オオヤマネコ，カワウソ，チンチラ，キツネ，イタチ等の小型，中型の野生動物を捕るようになった。これらの動物の毛皮と，シカ類やクマ，オオカミから得られる鹿茸，クマの胆，麝香，鹿心血，鹿の胎盤，鹿の陰茎，鹿の尾，クマの手，クマの脂，オオシカの鼻等を商人に売り，彼らから自分達の生活必需品を交易で入手するようにもなった。それによって余剰の獲物が商品に変わり，自給自足の自然経済ではなく，商品経済に向けて歩み出していった。

エヴェンキとオロチョンは長い狩猟活動の中で，豊富な狩猟経験と知識を積み重ね，動物の生態，習性及び自然の法則を把握して，効果的な狩猟方法を確立した。そして，それらを代々受け継ぐ間に，整備，発展させていった。多彩な狩猟文化は，その結果生じたものである。

季節と動物の習性によって，エヴェンキとオロチョンの狩猟生産活動は大体幾つかの時期に分けられている。すなわち，春の 2 ～ 3 月の「シカの胎盤期」，5 ～ 6 月の「鹿茸期」，9 月の「シカの交尾期」，10 月初雪から次の年の雪解け前までの「毛皮獣猟期」である。「鹿茸期」とは，春になって生え始めてきた皮膚に包まれた角（袋角）を得ることを目的にしたシカ猟での季節である。鹿茸は漢方薬の精力剤として需要が高い。「シカの交尾期」とは，9 月の交尾の季節に，雄を鹿笛などでおびき寄せて捕る時期である。この頃の雄ジカは体格も大きく，堂々としていて，大きな肉を得ることができる。雪が降り始めてから始まる「毛皮獣猟期」は文字通り，美しい毛皮を持つ動物の猟期である。クロテン，ギンギツネ，ヤマネコ，テン，イタチ，カワウソ，チンチラなどが対象となる。

エヴェンキとオロチョンの狩猟方法は大きく 5 つの種類に分類することができる。それを概説しておこう。

4.1　追跡猟

追跡猟は，エヴェンキとオロチョンの人々が季節に関わらず使用する狩猟方法である。この方法は野生動物の習性に関する豊富な知識と，動物の跡を追うための洞察力

と体力が決め手となる方法である。彼らは，野生動物の足跡を弁別する驚くほどの観察力と洞察力を持っている。彼らは野生動物の足跡を見つけると，瞬時的にどんな動物か，新しい足跡か古い足跡か，驚いて走ったのかゆっくり走ったのか，雄か雌か，数，大きさ等見分けることができる。また，動物の糞や毛でその場所から離れた時間と方向も判断できる。これらの状況を総合的に分析した後，追うべき方向と目標を定めて，獲物を追跡し，常に予定の時間と地点で獲物を捕る事ができる。

アカシカは，体格が牛ぐらいで，嗅覚が敏感，警戒心が非常に強い動物である。向かい風に向かって移動する習性がある。十数 km 離れたところから風に乗ってくる匂いも嗅ぎ分ける事ができる。アカシカは主に夜間活動して，山腹や川沿いで草を食べる。昼は山頂付近で横になって，周囲を警戒する。危険を感じると直ぐ森の奥に逃げ去っていく。逃げる時に，森の中をむやみに走り回り，風下に身を隠す。アカシカのこの習性は，足跡を乱して，危険から身を守るためと考えられる。しかし，経験豊富な猟師は，アカシカのこの習性を見抜いて，乱れた足跡を追跡せず，先に，風が吹く先に迂回して，アカシカを確実に捕る（図 26）。

ヘラジカも重量級の野生動物の一種である。頭高約 2.6 m，肩までの高さ約 2 m，大人のヘラジカの体重は約 200 ～ 250 kg で，体形は牛と似ている。ヘラジカの警戒心はアカシカより劣っていて，夜間だけ山間の平地で草を食べたり，河で水を飲んだりする。昼の大部分の時間は山腹で休みを取る。ヘラジカは猟師に追われると風に向かって逃げる習性があるため，猟人は風を避けて捕る（図 27）。

かつて大，小興安嶺地域にイノシシの数は少なく，1930 年代から徐々に増えてきた。イノシシ猟は秋に行われる。10 月になるとイノシシが肥るため，走るのが遅く，かつ持久力も落ちる。経験のある猟人は猟犬を使ってイノシシを追い駆ける。イノシシは何 km も追いたてられると，走れなくなるのである。疲れてイノシシの足が止まったところを見て，弓矢あるいは銃で射止める。

エヴェンキとオロチョンの人々は，普段は徒歩またはスキーをはいて追跡猟を行う。猟犬，刀，弓，槍と銃も欠かせない道具類である。その中でも猟犬は猟師にとって一番の助手で，彼らの働きが追跡猟の成否を分けることもある。

4.2　囲み猟

囲み猟は一種の集団猟であり，昔のエヴェンキとオロチョンの主要な狩猟方法だった。猟銃がなかった 18 世紀以前の時代では，弓が最も先進的な狩猟用具だったが，それを持っていても集団の力がなければ，凶暴な動物や大型野生動物を捕ることは非

常に困難だった。伝説によれば，昔，動物の数が少なく，何年も獲物が捕れないことがあった。ある日，エヴェンキとオロチョンのある氏族長が氏族の全員を連れて猟に出た。皆で山 1 つを包囲し，囲み猟を行った。包囲の枠を少しずつ縮小して，獲物を追い込んで，最後に，皆の力で沢山の獲物を捕ったという（王士媛・馬名超・白杉編 1989: 28–29）。エヴェンキとオロチョンはこのような囲み猟を *yunakette* と言う。囲み猟は氏族を中心とする彼らの社会で重要な役割を果たしていた。

エヴェンキとオロチョンの囲み猟には落とし穴や罠を使うものもある。例えば，まず女の人が柵で沢山の野生動物がいる山を囲み，幾つかの出口を作る。各出口には落とし穴を掘って，穴の上を草で覆う。それから，氏族のメンバー全員で太鼓や鉦を叩きながら大声を出して，野生動物を山から追い出す。野生動物が驚いて，作った出口から逃げるため，落とし穴に落ちる。それを猟師たちが弓で射止めるのである。また，山の谷の出口に麻縄で作ったくくり罠を 1 列に仕掛け，動物をそちらに駆り立てていく方法もある。罠にかけられた獲物を猟師たちが刀で刺しとめる（図 28）。

内モンゴル自治區のフルンボイル市に管轄されている根河市敖魯古雅郷のトナカイエヴェンキの居住地の周りの山奥に岩画がある。それはこのような囲み猟を表しているとされる。1980 年代の初期の考古学的な調査で，それは 300 年前のものと認定された（趙 1987）。この絵画は「阿娘尼岩画」と呼ばれ，具体的には額尓古納河（アルグン川）右岸の支流（牛耳河）のさらに支流である阿娘尼河の石崖にある。阿娘尼はエヴェンキ語で「絵」という意味である。絵にアカシカ，トナカイ，人，猟犬，獲物を囲んで狩猟する場面，及び伝統宗教シャマニズムを表現するシャマンの太鼓などが描かれている。絵の中では 5 名の狩人が鹿を狩猟している場面が描かれている。

囲み猟には規模の違いによって，大囲み猟と小囲み猟と分けることができる。大囲み猟は数十人で行い，小囲み猟は 4 ～ 9 人で行う。人の数によって，捕れる獲物の数が左右される。

4.3　誘い猟

誘い猟は，主にアカシカ，ヘラジカとノロジカ等を捕るのに使われる。誘い猟の道具としては，鹿笛類がある。毎年の 8 ～ 11 月の末はアカシカとヘラジカの交尾期間である。この時期に，猟人が鹿笛で雄ジカの鳴声の擬声音を出すと，周辺にいる雄ジカがそれを聞いて，近くにライバルがいると勘違いして，走ってくる。猟師はその機会を利用して，鹿を射止める。

毎年の 5 ～ 6 月は雌ジカの出産期である。エヴェンキとオロチョンの人々は，ノロ

ジカの耳が付いている頭の皮で作った帽子を被り，ノロジカの毛皮で作った長衣を着て，ヘラジカの足の毛皮で作った靴を履いて，ノロジカを偽装する（図 29，図 30）。鹿笛で子鹿の擬声音を出す。雌ノロジカが，子鹿が自分を呼んでいると思い込んで，走ってくるところを猟人が射止める。まれに 11 月のノロジカの交尾期に樺の皮で作った笛で，ノロジカを誘い，射止める場合もある（図 31）。あるいは，口笛で鳥を誘う（図 32）。野生動物の擬声を用いて狩猟するのはエヴェンキとオロチョンの間で常に使われてきた狩猟方法である。この狩猟方法は，1980 年代に高性能の軍用銃が導入されるまで，使われていた。

4.4　待ち伏せ猟

待ち伏せ猟は，エヴェンキとオロチョンがアカシカとヘラジカを捕る時に使う主な方法である。夏季，アカシカとヘラジカが塩を舐める習性を利用して，いつも出没する河辺付近の平地の草を刈り，そこに棒で幾つかの穴を開けた後，塩を入れる。その塩を水で溶かして，土に浸透させる。一連の作業によって，塩花が地表に現れ，人口の塩場ができる。日が暮れる前に猟人達は自製の塩場に着いて，臭いで自分たちがいることがばれないように，風下側で獲物を待ち伏せる（図 33）。アカシカやヘラジカが塩を舐めに来たところを射止める。

エヴェンキとオロチョンがもうひとつよく使う狩猟方法は，ヘラジカが夜，池沼の水草「針枯」を食べる習性を利用した捕獲である。まず，白樺の皮で作った舟に乗って，池沼の隠蔽できる場所に身を隠す（図 34）。ヘラジカが現れ，水の中に入って水草を食べ始めると，舟で静かに接近し，ヘラジカの腹部肋骨間を狙って，槍で腎臓を刺す。そして迅速に槍を抜き取り，傷口に水を入り込ませる。傷口に水が入ると，ヘラジカは即死する。槍を迅速に抜くのが肝心で，それをしないと，ヘラジカは槍に刺されたまま，森に逃げ込んでしまい，猟は失敗する。射程距離が長いライフル銃が普及するようになって，この方法は使われなくなった。

エヴェンキとオロチョンは仕掛け弓でアカシカとヘラジカ等の大型の野生動物を捕る場合がある。冬に川の枝分かれの所に，アカシカとヘラジカの好物である栗毛色の植物 *ima* が生えている。*ima* が生えている所を柵で囲み，1 つの出入り口を残しておく。その出入り口に仕掛け弓を設置する。アカシカやヘラジカが出入り口を通る時に，仕掛け弓の紐が足に引っ掛けられれば，仕掛け弓が作動して，獲物を射止める。このような仕掛け猟は，10 日間隔で確認を行う。夏になると捕えた獲物が腐敗する可能性があるために，仕掛け弓は回収される。

4.5　穴猟

よく知られているように，クマと同様に穴の中に生息している野生動物は少なくない。クマは初冬から次の年の雪解け期まで，木の幹の中心部分が朽ちてできた空洞などの穴の中で冬眠する。経験のある猟師は，穴の中にクマの有無を迅速かつ確実に判断できる。クマが冬眠している穴を見つけると，彼らは色々な音を出して，クマを起こして，誘い出すのである。それでも出て来ない場合は，猟犬をけしかけ，クマを引き起こす。あるいは石，棒，煙が出る草束等を穴の中に投げ込む。猟人達の騒乱に耐えられないクマは，穴から出てくる。待ち伏せをしていた猟人がクマを射止めるのである。クマを捕る時には，風に向かって走ってはいけない。風に向かって走れば，クマの目の上の長い毛が風に吹かれて，より良く見えるようになり，猟人を攻撃してくるからである。風の方向に沿って走れば，クマの目の上の長い毛が視界を遮って，目標を見失う。その機会を利用して，逃げることやクマを射止めることができる。しかし，エヴェンキとオロチョンの人々は，出来る限りクマを捕る狩猟を控えてきた。やむを得ずクマを捕った場合は，捕ったクマに対して，様々な儀式を行う。クマの内臓と骨を捨てる事が禁じられているために，風葬の儀式を行う。これは，クマが自分達の先祖であり，崇敬の対象だからである。

エヴェンキとオロチョンには以上の 5 つの方法以外にも，罠や仕掛け銃等を用いた狩猟方法が多々あった。特にオオヤマネコ，キツネ等の小型あるいは中型の野生動物に対して，様々な罠類や仕掛け銃等を用いた狩猟方法が使われた。小型・中型の野生動物を銃で捕ると毛皮に大きな傷を与え，商品価値が大幅に落ちる。そのために，昔から，エヴェンキとオロチョンの人々は毛皮が傷つけられないように，出来る限り弓，仕掛け弓，罠類を使ってきた。しかし他方で，エヴェンキとオロチョンには鳥類やトラ，オオカミ，ウサギ等の猟に特化した猟師はいなかった。

エヴェンキとオロチョンは貴重な毛皮を売るために，しばしば，クロテンを捕ってきた。1950 年代の民族学調査によると，大，小興安嶺ではクロテンの数が極めて少なく，20 世紀初期に他地域から数多くのクロテン運んできてここで放ったが，1916 年頃乱獲のためにほぼ絶滅したという。また，1906 年から 1910 年まで，中国の満州里からも毛皮が貴重であるクロテンを入れたが，これも乱獲によって絶滅した。（內蒙古自治區編輯組編 1985a: 77; 1985b: 160, 310; 1986: 176）。あるエヴェンキの話によると，エヴェンキがレナ川の流域で暮らしていた時には，そこに数多くのクロテンがいたという。

クロテンは主に山の奥や森の中の草原状の所に生息している。普通は穴を掘って巣を作る。あるいは，木の穴や石と石の隙間に巣を作る場合もある。クロテンを捕る狩猟活動は，毎年 10 月から次の年の 3 月までで，大地が雪に覆われている時期に行われる。彼らはテンが昼間巣穴に隠れて，夜になると巣穴から出てきて餌を探す習性に従って，テンを捕る 3 種類の方法を考え出した。a）元の巣穴の口を埋めて，下に新たな穴を掘り，煙でテンを追い出す。あるいは，スコップ，棒，ナイフ等の器具を使って，テンを掘り出す。そして猟犬の協力で，クロテンを追い詰め，弓で射止める。この方法では最後は追跡猟になる。b）テンの巣穴の口に麻や馬の尾の毛を編んで作った網を仕掛ける。もしくは，巣穴の口に木の鋏や鉄の鋏を仕掛ける。あるいは，馬の尾で作った罠を仕掛ける。テンが夜になって出て来た所，仕掛けにかかり捕えられる。これは待ち伏せ猟の一種である。巣穴に獲物がいるかどうかは，その前に足跡列が偶数あるかどうかで判断する。もし偶数ならば必ず潜んでいるとされる。c）テンが良く通る道に，仕掛け弓を設置して捕る。弓は矢がちょうど心臓に命中する高さに調整して設置する。

大，小興安嶺にはオオヤマネコもあまり多くはいないが，狩猟対象とされてきた。エヴェンキとオロチョンは，オオヤマネコの肉も食べるが，それは主に毛皮を取るために捕獲される。オオヤマネコは木と木の間の倒木を走り渡るのが得意である。夏は深い草の中で身を隠して，冬は石と石の間で身を隠す。オオヤマネコは跳躍力があり，走るのも速い。しかし，100 m 位走ると息切れて止まってしまう。猟師達は，オオヤマネコのこの習性を利用して，主に冬季に猟犬を連れてオオヤマネコ猟を行う。まず猟犬でオオヤマネコを木の上まで追い込んでから，猟人が弓矢で仕留める。また，オオヤマネコが，ノロジカ等の獲物を捕り，それを何日間も食べ続けるため，猟人がオオヤマネコの食べ残した獲物の残骸を見つけると，そこに仕掛け弓を仕掛けて捕らえることもある。

毎年の 10 月から次の年の 3 月中旬まで，チンチラの狩猟期となる。エヴェンキとオロチョンはチンチラを肉や毛皮を取る目的で捕獲する。質のいい毛皮を商人に売り，自分達の必需品を手に入れる。質がよくないものは自分たちで使って，手袋，服飾，布団など日常用品を作る。チンチラは狡賢く，最も捕りにくい獲物のひとつである。まず，チンチラは木の上で移動するため，雪に足跡が残らない。木の葉や枝を利用して，巧みに身を隠すことが出来る。故に，チンチラは猟師達を悩ませてきた。しかし，猟犬は鋭い嗅覚でチンチラを発見して，1 本の木の上に追い詰める。猟師はそこを弓で射るのである。これも一種の追跡猟である。これ以外に，また 2 つの狩猟方

法がある。1 つは，チンチラが良く出没する所に，木の鋏 *qyarekke* を仕掛ける。チンチラが鋏の踏み板を踏むと，仕掛けが作動して，チンチラを捕える。この方法でのチンチラ猟は，女性たちがしばしば冬の狩猟活動として行う。2 つ目は，チンチラがしばしば歩く獣道に，仕掛け弓を仕掛けて捕る方法である。

イタチは木の穴に巣を作る。エヴェンキとオロチョンの人々は，イタチの毛皮を取るために狩猟活動を行う。イタチを捕る方法は 2 つある。1 つは追跡猟，すなわち猟人が犬を使って，イタチを木の上まで追い詰めて，弓で射る。2 つめは待ち伏せ猟，すなわちイタチが巣穴に逃げ込んだところに，仕掛け網や仕掛け鋏を仕掛けてから，煙を吹き込んで，煙でイタチを追い出して捕らえる。

キツネも毛皮を取るために捕獲される。しかし，他の野生動物と違って，キツネを捕るためだけの狩猟方法はない。キツネを捕る方法は，他の小型野生動物を捕る方法とほとんど同じである。

カワウソも大，小興安嶺には数少ない。しかし，冬のカワウソの毛皮は，毛が太くて，綿毛が厚く，価値が高いため，人々は冬季にカワウソを捕ってきた。カワウソは生活時間の大半を水の中で過ごす。1 回の潜水時間は 10 分位で，頭を水面に出して呼吸をする。まれに河辺で歩く事もある。猟師は犬の嗅覚を借りて，カワウソの巣を見つけ出す。カワウソは主に次の方法で捕る。a）氷にノミで穴をあけて，穴から頭を出して呼吸するカワウソを銃や弓で仕留める。b）カワウソが頻繁に出没する河辺に仕掛け弓を仕掛けて捕る。c）凍結した河に堤防を築き，堤の中に水を一杯になるまで注ぐ。カワウソが，逃げる所がなくなり，頭を出した隙に，銃や弓で仕留める。まれに水の中に仕掛け弓を仕掛けてカワウソを捕ることもある。

かつてエヴェンキとオロチョンはノロジカをあまり捕らなかった。猟の帰りに，偶然に会った時だけ，ついでに捕る程度だった。しかし後年，ノロジカの臍の緒が貴重な薬剤と香辛料になることがわかると，盛んに捕るようになった。エヴェンキとオロチョンがレナ河流域に住んでいた頃には，ノロジカの数は多かった。しかし，大，小興安嶺にはノロジカは少なく，そこに移住してからは，貴重な狩猟資源となった。

5　海外の狩猟民族の狩猟用具と方法との比較

エヴェンキとオロチョンは 17 世紀から 18 世紀初期には，バイカル湖より東，外興安嶺の南北，アムール川の北からサハリン島に至る広大な地域に生活していたので，アムール川流域及び沿海地方に住んでいたツングース系民族と言語的，文化的に密接

な関係をもっていた。したがって，生産方法や狩猟用具にも共通点が多数見られた。さらに興味深いのは，この点について，同じ時代の日本のアイヌ民族とも共通点が見られることである。しかし，その後 300 年間にわたって異なる政治経済体制下にいたことから，これらの人々の生産方法は変化，分化していった。異なる文化変容のプロセスを経て，そのまま保たれた要素もあれば，破棄されたものもあり，まだ新しいコンテンツも注入されたため，これらの民族の狩猟方法，用具には相互に多くの違いが生まれた。ここでこれらの諸民族の狩猟用具，狩猟方法について簡単に比較を行いたい。

大型野生動物の狩猟方法は，アムール川流域及び沿海地方のツングース系民族とエヴェンキとオロチョンとはきわめて類似している。すなわち，巻狩り，追跡猟，待ち伏せ猟などを使う（佐々木 2000: 51）。また，「猟犬を使う狩猟も見られ，またナーナイはアカシカ猟に際して鹿笛を使う。…彼らは白樺の皮や木を使って特殊な笛を作った。しかも，非常に巧みにこの笛を使って，アカシカの鳴声に似た声が出せる。」そして，「19 世紀後半まで，アムール川地域の民族は猟銃を使わず，罠あるいは他の狩猟方法で鳥猟をしていた」（傑列維揚科 1987: 55–56）。上記から擬声音，罠，猟犬を使って，同じ猟具，方法で狩猟していたことが見て取れる。図のように，エヴェンキとオロチョンの仕掛け弓は設置方法，構造ともにアイヌのものと酷似している（図 35 ～図 39）。エヴェンキやオロチョンが 300 年前から使用してきた「竜骨」（ロンゴ）と呼ばれるオオカミを捕らえる罠（木の二股になった枝を利用した罠で，餌で獲物をおびき寄せ，餌に飛びつこうとすると二股に前足を挟まれて動けなくなる。そこを捕らえる）も，全く同じものが 19 世紀のサハリンのアイヌやニヴフの間でキツネ用の罠として使われていた。そのほか，小型動物を捕る罠も類似している。しかし，これらの種類の罠は，筆者の調べでは中国領内の他民族の狩猟用具には見当たらない。

これに関しては，以下の可能性が考えられる。1 つはかつてエヴェンキとオロチョンは，アイヌと密接な交流があった。故に，自然に対応する方法も極めて類似していた。2 つめは，竜骨にも現れているように，動物によっては現在でも 300 年前と同じ種類の動物がまだ身近にいて，それを捕らえる道具が必要だったからである。

エヴェンキとオロチョンのクロテンなどの小型・中型野生動物の狩猟方法と狩猟用具は，アムール川流域と沿海地方のツングース民族やサハリンのアイヌの罠に比べれば単純である。例えば，沿海地方のツングース民族であるウデヘには「クロテン用の輪罠（フカ）」,「クロテン・ミンク用圧殺罠（ドゥイ）」,「皮毛獣用圧殺罠（カファリ）」,「クロテン用罠（ハダナ）」,「クロテン用のくくり罠（フカ）」（スタルツェフ 2000:

34），及びサハリン・アイヌの「クロテン用のくくり罠」,「石を利用して押さえつける罠」（出利葉 2000: 26）など複雑な構造を持つ多種多様な罠類を使用するのに比べ，エヴェンキとオロチョンの場合には木の洞に入っている小型動物を煙でいぶし出して捕まえるための罠や網，鋏と，太い丸太あるいは氷を柱で支え，棒に餌をつけて動物をおびき寄せて圧殺する罠ぐらいしかなく，いずれも構造は単純である。しかし，サハリン・アイヌの「石を利用して押さえつける罠」は，エヴェンキとオロチョンの丸太や氷で圧殺する罠と捕殺原理は同じであり，その発展形状であるといえるだろう。

17 世紀から 18 世紀初頭にかけての時代，エヴェンキとオロチョンの人々は清とロシアの間の戦争（1650 年代～ 89 年）を避け，よりよい条件の土地を求めて，現在の住居地に移住してきた。当時は数万人の人口を有していたという。このことは，彼らの生活が決して貧しくなかったことを示している。しかし，他方で人口の増加と狩猟用具の改良によって生産能力が大幅に上昇したために，以前に居住していた森の野生動物は減少し，彼らの生活を支えられなくなり，移動を余儀なくされたともいえる。しかし，大，小興安嶺では交易用の毛皮が捕れる小型・中型の動物が少なく，捕獲することも難しかった。例えば，クロテンのような貴重な動物は，20 世紀初頭の 10 年間捕獲しただけで，この地域から姿を消し，オオヤマネコの数も激減した。そのうえ毛皮の質も悪く，商品価値も低かった。そのために，厳しい寒さを冒してまでこの地方にやってきて毛皮を交易する商人も非常に少なかった。

17，18 世紀には一部のエヴェンキとオロチョンが清朝に帰順して八旗に編入されていたが，彼らが生産する毛皮に対する需要は限られており，毛皮獣狩猟に特に励む必要もなかった。しかし，20 世紀初期にアムール川流域及び沿海地方で毛皮獣の乱獲によって毛皮交易が衰えてくるとともに，大，小興安嶺地域にもエヴェンキ語やオロチョン語で *inda* と呼ばれる中国商人やロシア商人が来るようになった。エヴェンキとオロチョンは鹿角，鹿の陰茎，クマの胆，クマの掌，麝香と，商人がもたらす塩，小麦粉，鉄などの日常必需品を交換した。しかし，交換で得る生活必需品はわずかであり，彼らには蓄財という概念もなかった。彼らは万物有霊という自然崇拝と自然調和を重んずるシャマニズムを信仰し，自然から必要以上なものを取らない習慣があり，なおかつヘラジカ，アカシカ，ノロジカ，イノシシ等大型野生動物が十分に彼らの衣食を満たしたため，小型動物を真剣に狩猟の対象とする必要がなかった。したがって，小型動物に対する狩猟方法や狩猟用具は発達せず，昔ながらのものがほとんどそのまま維持されたわけである。

アムール川流域の原生林と沿岸地域は，動物の種類の多さで知られている。特に，

クロテン，ラッコ，ギンギツネ，カワウソ等の高価な毛皮を持つ動物以外にも，チンチラ，キツネ，オオヤマネコ，アナグマ，イタチ，オオカミの毛皮等も多く産出して，毛皮業はこの地域だけではなく，国際的にも大きな意義を持ち，毛皮交易が発達していた。歴史資料を使った佐々木史郎の研究によれば，すでに旧ソ連時代の以前にも，この地域は歴史的に栄えていたことを知ることができる（佐々木 1996）。特に 18 世紀半ばから 19 世紀半ばまでの 100 年間，中国，日本との商売で高い利益を得る富裕層が現れていた。生活状態がよくない人がいた一方で中国製の絹織物の衣装を着て接客する者や日常生活に中国製品や日本製を常用する者もいた。アムール川植民地の先駆者として 19 世紀にこの地域を調査した L・シュレンクの調査報告には先住民の間には貧しい生活をする貧困層の人々は出て来ない。それと同時に，この地域のシャマニズム信仰は中国の道教や満洲の天神信仰の影響をうけていた。

したがって，アムール川流域や沿海地方の先住民の間では，経済的な利益を追い求める社会的な傾向とシャマニズムの弱体化が関係して，商業的小型・中型獣狩猟が盛んになり，そのために狩猟用具が改良，開発された。それが，この地域の狩猟用具の変化と複雑化の重要な原因であると考えられる。経済的な豊かさは，この地域の先住民たちの物質文化と精神文化を発展させ，アムール川流域の独自文化を発展させた。しかし，帝政ロシア時代以後，間宮林蔵とシュレンクの時代に見られた中国，日本との朝貢や貿易が衰退したために，先住民たちの社会と文化の繁栄を支えた商業活動もできなくなってしまったのである。

以上の考察から次のようなことがいえる。エヴェンキとオロチョンの現在の地への移住は 17 世紀から 18 世紀初頭行われたのに対して，アムール川流と沿海地方における毛皮交易の繁栄は 18 世紀半ばから 19 世紀半ばの 100 年間だった。言い換えれば，エヴェンキとオロチョンの移住の方が先で，アムール川流域での毛皮交易の繁栄の方が時間的には後ということになる。経済的利益の追求，地域内における大型野生動物の急速な減少，そしてシャマニズムの弱体化によって，アムール川流域及び沿海地方の人々は生存と発展のため，毛皮を捕れる小型・中型の動物をより多く求めざるを得なくなった。この変化が，狩猟用具の改良と発展に繋がった。それに対して，エヴェンキとオロチョンでは狩猟活動に古くからの伝統的な用具，方法が使われ続けた。これがエヴェンキとオロチョンとアムール川流域の人々との間で，小型・中型動物の狩猟のための用具が異なる主な原因であると考えられる。

6　結語

以上のように，エヴェンキとオロチョンの狩猟にかかわる伝統的な文化を概観し，他の周辺民族のものと比較することによって以下のような結論を導き出すことができるだろう。すなわち，狩猟とは人々が訓練・学習によって得られる一種の能力であり，行動様式である。それは，常に特定の自然的，社会的条件に適応するように，分化，統合，変異，変容を重ねていく。言い換えれば，ある自然環境，生存条件，経済的な基礎があれば，必ずそれに相応する生産活動があり，さらにその生産活動に相応する文化がある。文化は人類が生存する自然環境と経済的基礎から切り離せないものであり，人類の生存の基礎にある生産も，文化的背景に強く規定される。エヴェンキとオロチョンの狩猟文化もまさに自然環境に対する適応の産物であり，生産活動との相互規定的な関係の中で形成されたのである。彼らはまた，他の諸民族と同様に，生活に必要な知識を蓄積し，生産活動に必要な技能を規範化して，文化として世代を越えて伝えてきた。エヴェンキとオロチョンの狩猟文化に関する研究は，人類の北方森林にまつわる自然環境，社会環境への適応という観点からすすめるべき，文化人類学の中の重要な課題の 1 つと考えられる。

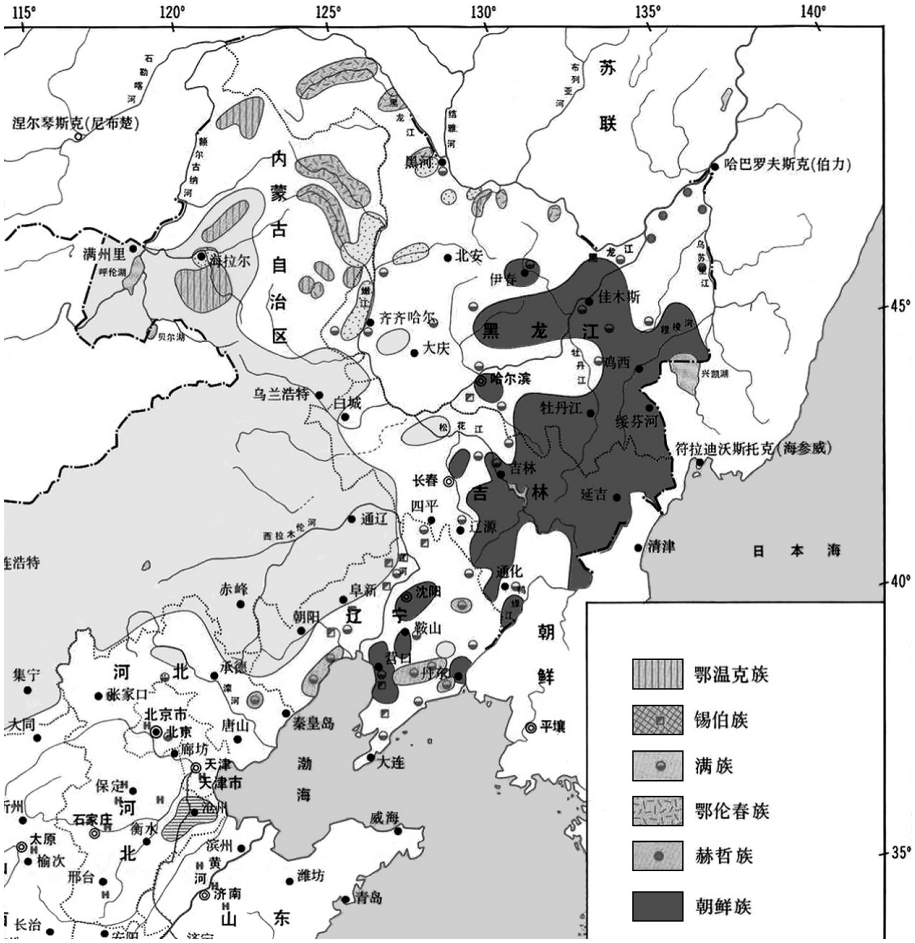
注

1）　グループはエヴェンキ語で *ankkenakat* と言い，オロチョンでは *anaga* と言う。グループのリーダーはエヴェンキ語で *gikoreiduaren* と言い，オロチョン語では *tatanda* と言う。
2）　平等分配の詳細は內蒙古自治區編輯組編（1986: 192–195, 527–532），及び內蒙古自治區編輯組編（1985a: 96–99）を参照。

引用文献（中国語の文献はすべて繁体字を用いて表記している）

趙振才
1987 「大興安嶺古老山林裏的岩畫古跡」『北方文物』第 4 期，pp. 43–45。
傑列維揚科 E. I.（林樹山，姚鳳譯）
1987 『黑龍江沿岸的部落』長春：吉林文史出版社。（Деревянко, Е. И. 1981 *Племена Приамурья: I тысячелетие нашей эры: очерки этнической истории и культуры*. Новосибирск: Наука, сибирское отделение.）
出利葉浩司
2000 「アイヌの罠をめぐって──なぜ罠が使われたのか？」『アジア遊学 17 特集北方諸民族文化のなかのアイヌ文化──生業をめぐって』pp. 19–30，東京：勉誠出版。
卡麗娜
2006 『馴鹿鄂溫克人文化研究』瀋陽：遼寧民族出版社。

瑪尼
2000 『高禄崁馴鹿人』深圳：代欽芸術広告工作室。
内蒙古自治區編輯組編
1985a『鄂倫春族社會歴史調査』（第一冊）呼和浩特：内蒙古人民出版社。
1985b『鄂倫春族社會歴史調査』（第二冊）呼和浩特：内蒙古人民出版社。
1986 『鄂溫克族社會歴史調査』呼和浩特：内蒙古人民出版社。
秋浦
1978 『鄂倫春社會的發展』上海：上海人民出版社。
秋浦（主編）
1984 『鄂倫春族』（畫冊）北京：文物出版社。
佐々木史郎
1996 『北方から来た交易民――絹と毛皮とサンタン人』東京：日本放送出版協会。
2000 「アイヌとその隣人たちの毛皮獣狩猟――ロシア極東先住民族のクロテン用の罠を中心として」『アジア遊学 17 特集北方諸民族文化のなかのアイヌ文化――生業をめぐって』pp. 42–55，東京：勉誠出版。
スタルツェフ，A. F.
2000 「アムール川流域および沿海地方におけるツングース諸民族の伝統的生業の現在と過去」大島稔・永山ゆかり訳『アジア遊学 17 特集北方諸民族文化のなかのアイヌ文化――生業をめぐって』pp. 31–41，東京：勉誠出版。
王士媛・馬名超・白杉編
1989 『鄂溫克族民間故事選』上海：上海文芸出版社。



地図 1　エヴェンキとオロチョン分布図
（『中國少數民族分佈圖』（東北部分）http://hiphotos.baidu.com/linhuan1973/pic/item/8aef38d2df9cde53a08bb712.jpg による）

図 1　シャマンの儀礼 1（秋浦（主編）1984：117，図 260）

図 2　シャマンの儀礼 2（秋浦（主編）1984：117，図 261）

図 3　狩猟をする前の祈祷“山の神をひざまずいて拝む”（秋浦（主編）1984：114，図 247）

図 4　組頭が任務を割り当てる（秋浦（主編）1984：40，図 96）

図 5　児童が樺の皮で作った舟を漕ぐ試合（秋浦（主編）1984：127，図 282）

図 6　射撃術を指導する（秋浦（主編）1984：24，図 48）

図 7　児童が矢を射る試合（秋浦（主編）1984：130，図 287）

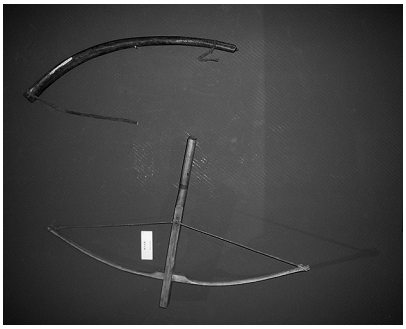


図 8　大弓（中国内モンゴル自治區鄂倫春博物館にて筆者撮影）

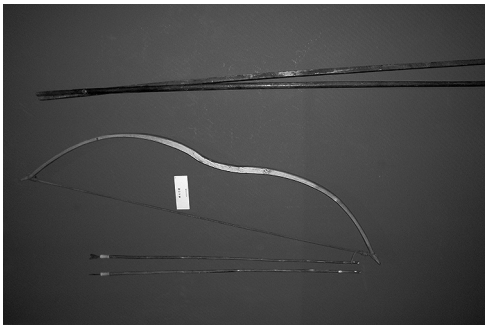


図 9　矢 1（中国内モンゴル自治區鄂倫春博物館にて筆者撮影）

図 10　矢 2（国立民族学博物館収蔵庫にて筆者撮影　標本番号 H129936）

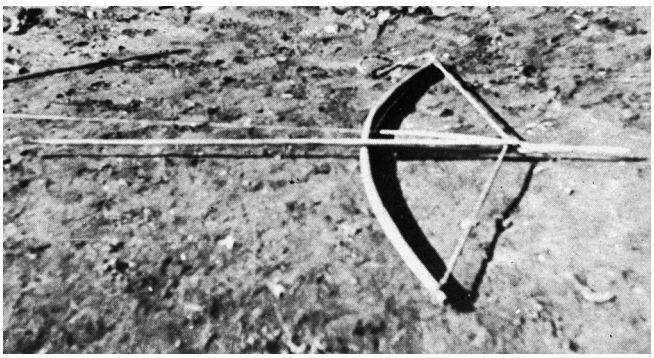


図 11　仕掛け弓を平地に設置する（秋浦（主編）1984：37，図 86）

図 12　鹿笛 1（中国内モンゴル自治區鄂倫春博物館で筆者撮影）

図 13　鹿笛 2（国立民族学博物館収蔵庫で筆者撮影 標本番号 H129855）

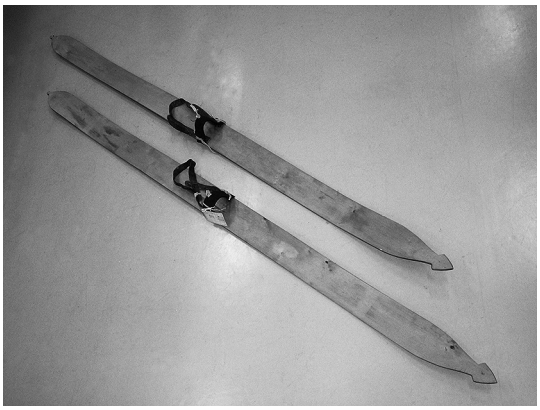


図 14　スキー板（国立民族学博物館収蔵庫で筆者撮影 標本番号 H129926）

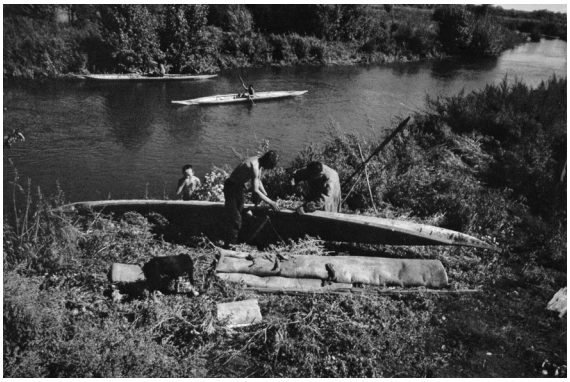


図 15　白樺の皮で舟を作る（秋浦（主編）1984：64，図 146）

図 16　白樺の皮で作った舟に乗って魚を突き捕る（秋浦（主編）1984：47，図 107）

図 17　木鋏（国立民族学博物館収蔵庫で筆者撮影　標本番号 H129938）

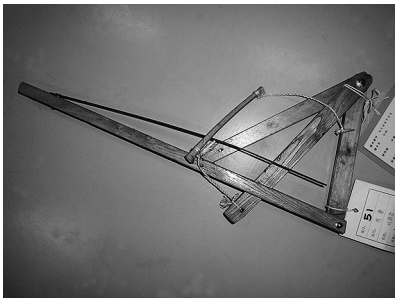


図 18　木鉄製銃（国立民族学博物館収蔵庫で筆者撮影　標本番号 H129733）

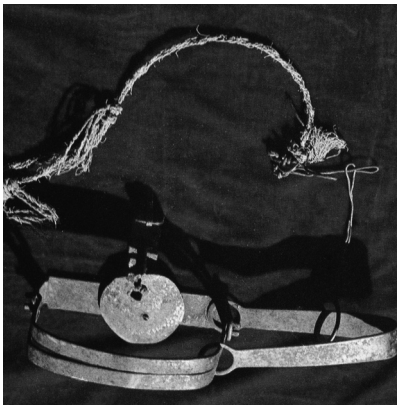


図 19　鉄で製作する銃（秋浦（主編）1984：38，図 90）

図 20　鞴 *kurugge* を使って鉄器を鍛錬する 1（瑪尼 2000）

図 21　鞴 *kurugge* を使って鉄器を鍛錬する 2（瑪尼 2000）

図 22　オロチョン人が鉄器を鍛錬時に使用する鞴（秋浦（主編）1984：75，図 181）

図 23　射程のある猟銃で猟をする（秋浦（主編）1984: 93, 203）

図 24　猟に出る（秋浦（主編）1984：93，図 202）

図 25　長距離猟銃での猟（内蒙古自治區編輯組編 1986：附図 2-2）

図 26　追跡して捕ったアカシカを引っ張って帰る（秋浦（主編）1984：139，図 308）

図 27　ヘラジカを追跡する（秋浦（主編）1984：29，図 66）

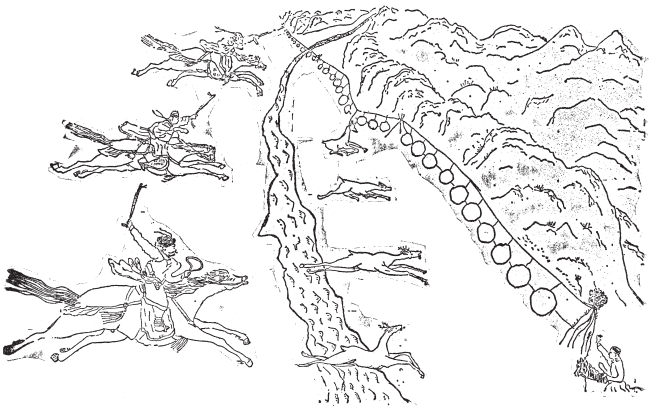


図 28　谷間の出口に多数のくくり罠を下げた麻縄を張り，獲物を集団でそこに追い込む（内蒙古自治區編輯組編 1986: 46, 図 3）

図 29　ノロジカの頭の皮で作った帽子（中国の内モンゴル自治區鄂倫春博物館で筆者撮影）

図 30　ヘラジカの足の毛皮で作った靴とズボンカバー（中国の内モンゴル自治區鄂倫春博物館で筆者撮影）

図 31　鹿笛で擬声音を出し，雄ジカを誘い出してから捕る（秋浦（主編）1984：27，図 57）

図 32　口笛で榛鶏（雷鳥科の一種）の鳴声を真似する（秋浦（主編）1984：30，図 72）

図 33　塩場にしゃがんで待ち伏せ猟をする（秋浦（主編）1984：26，図 56）

図 34　白樺の皮の舟に乗って待ち伏せ猟をする（秋浦（主編）1984：45，図 103）

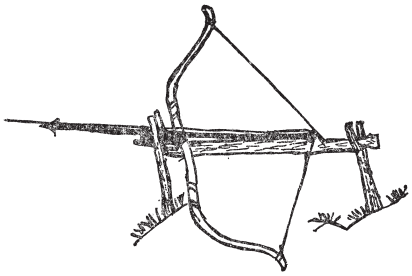


図 35　エヴェンキの仕掛け弓（内蒙古自治區編輯組編 1986: 45，図 2）

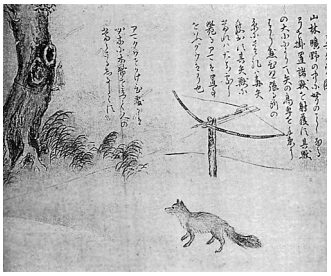


図 36　仕掛け弓（出利葉 2000: 22，写真 1）

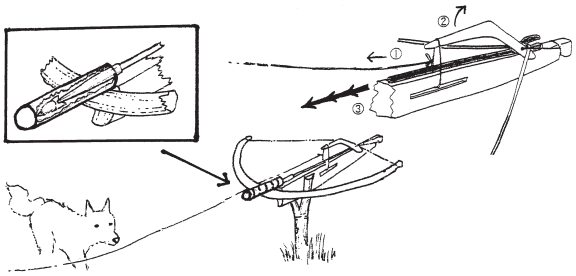


図 37　仕掛け弓の発射の仕組み（出利葉 2000: 24，図 1）

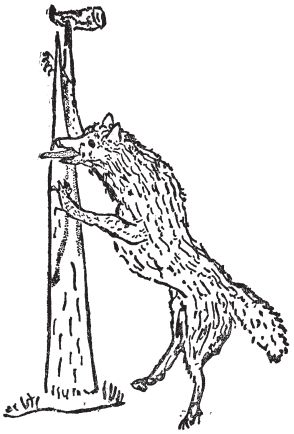


図 38　エヴェンキのオオカミ，イタチの足を挟む罠「竜骨」（ロンゴ）（内蒙古自治區編輯組編 1986: 52，図 13）

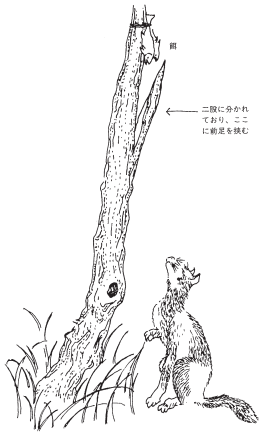


図 39　キツネの足を挟む罠（出利葉 2000: 27，図 7）